

浅井友詞・中山明峰(編集)

前庭リハビリテーション

めまい・平衡障害に対するアプローチ

評者 木村貞治

信州大学医学部保健学科理学療法学専攻

めまいやふらつきは、人にとって極めて不快な症状であり、日常生活活動やQOLの低下を招く原因となる。日本めまい平衡医学会において、めまいは、安静にしているときあるいは運動中に、自分自身の体と周囲の空間との相互関係・位置関係が乱れていると感じ、不快感を伴ったときに生じる症状と定義されている。めまいは、前庭機能障害などさまざまな原因によって惹起され、周囲や天井がぐるぐる回る回転性めまいと、体がふらつく、真っ直ぐ歩けない、などの浮動性めまいがあるとされている。厚生労働省の調査では、わが国におけるめまいの有訴者数は、約280万人に上ると報告されている。

このように多くの方が罹患されている前庭機能障害に対するリハビリテーションについて、海外では、1940年代にすでに報告がなされ、北米などでは多くの施設において、前庭リハビリテーションの専門の医師と理学療法士の連携による取り組みが行われていると報告されている。他方、わが国の理学療法は、これまで50年の歳月を刻んできたが、前庭機能障害のリハビリテーションの一環としての理学療法の取り組みは、まだ十分には普及していないのが実情であろう。このような状況に鑑み、めまいやふらつきなどの症状を呈する前庭機能障害患者に対するリハビリテーションの実践を普及させていくためには、制度面の整備と併せて、前庭系の構造と機能、前庭系の障害の原因・診断・理学療法評価・理学療法アプローチの実践などについての正確で系統的な理解を深めていくことが重要な鍵になると思われる。

浅井友詞先生、中山明峰先生を中心に取りまとめられた『前庭リハビリテーション』は、まさに、これらの系統的な知識を整理するための道標になると思われる。本書においては、まず、前庭系の構造と機能についての解説が、わかりやすい図表に基づいて示されている。次に、前庭系の障害の分類と原因、

診断、リハビリテーションにおける評価、前庭機能低下症に対するリハビリテーションの実際がイラストや写真によって具体的に示され、症例に基づく具体的な進め方も述べられている。さらに、良性発作性頭位めまい症、頸部障害に対するリハビリテーションの実際や、転倒予防、スポーツ選手に対する応用的なトレーニング方法も大変参考になる内容である。

今後、本書の内容が、めまいやふらつきに苦しむ方々に対する安全で効果的な理学療法の潮流を創出する契機となり、将来的には、それらの臨床実践の積み重ねを通して、本疾患に対する質の高い理学療法のエビデンスが発信されることを心から期待したい。



A5判・190頁・1色刷
定価：本体3,200円＋税
三輪書店刊、2015年